

# 平城京左京三条二坊二坪 (平城宮跡第186次) 発掘調査現地説明会資料

1988年5月14日(土)

奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部

調査地 奈良市二条大路南一丁目

調査期間 1988年4月～ 面積約2500㎡

## 1 はじめに

1986年10月以来、平城京左京三条二坊一・二・七・八坪にまたがる「そごうデパート」建設予定地に対して、継続的に発掘調査を実施してきた。これまでに調査が終了した面積は14500㎡にのぼる。その結果、奈良時代前半にはこの地に4町(坪)を占める広大な宅地が存在し、それは出土した木簡から、政府の中心として権勢をふるい、後に非業の死をとげた長屋王の邸宅である可能性が強いことが明らかとなった。他にも、平城京内の宅地では最大の面積をもつ建物や四面廂付の建物を主殿とする双堂形式の建物の検出、日本で最古の猿の墨画土器の発見など、平城京の実態を解明する上で大きな成果をあげつつある。これまでも、既に3回の現地説明会を開催し、その都度調査の概要を報告してきた。

今回の調査区は、平城京左京三条二坊二坪にあたり、前回の調査で検出した奈良時代前半の4町占地の時期の主殿のさらに西方となる。調査区のすぐ南方では、1979年に東鑑本店建設の際に部分的な発掘調査(平城宮跡第118-15次調査)を行っており、その成果をも合わせて二坪の中心部の様相が明らかとなった。

00

## 2 調査の概要

今回の調査で検出した遺構は、掘立柱建物20棟、掘立柱塀5条以上、溝5条以上、井戸3基、土塋などである。そのほとんどは奈良時代のもので、遺構の重複関係、配置などからA期～D期の4期に区分できる。

### A期

奈良時代前半にあたる。長屋王の邸宅と推定される、一・二・七・八坪の4町を占める広大な宅地の時期で、敷地内に掘立柱塀による区画を設ける。今回は、西限を画する掘立柱塀を検出した。東・南・北を画する掘立柱塀はこれまでの調査で検出しており、今回の調査結果と合わせて、区画の概要がほぼ明らかとなった。A期は、更に細かい時期区分がされているが、今回はA期に属する遺構は少なく、こうした細分は行なわない。

調査区の東では、桁行7間、梁間5間で南北に廂のつく東西棟(建物9)を既に検出しており、これが主殿となる。柱間の寸法は、桁行の中央5間が10尺(

約3m)等間、両端間が14尺(約4.2m)、梁間は10尺で、建坪にして103坪の広大なものである。建物内には、3個ずつ4列の床柱を立てた柱穴があり、この部分に床を張っていたことがわかる。建物9の西の妻柱から、西へ90尺で、東一坊大路の中軸線から東へ270尺の位置に、南北方向の掘立柱塀12がある。この塀が区画の西限を画する施設であり、A期を通じて存在していた。区画の広さは、七坪に双堂形式の建物が建ち、配置が最も整った時期で、東西が405尺(121.5m)、南北が280尺(84m)となり、3000坪以上の広大なものである。塀12は、南から5間分、北から6間分を検出し、中央の3間分は未検出である。出入口に関する施設が想定されるが、この位置にはB期の建物14が建ち、その基礎工事で破壊されている可能性もある。また、建物9の南20尺の位置には東西塀7があり、塀12から、建物9の東西の中軸線上までのびる。

### B期

奈良時代中期にあたる。一坪と二坪、二坪と七坪の間に坪境の小路をつくり、4町規模の敷地から二坪のみの1町規模の敷地となる。この時期の主殿は、1979年の調査でその一部を検出していた建物3で、桁行7間、梁間4間の南北廂付建物に復原できる。建物3の北廂から15尺の位置に、柱筋を揃えて建物4が建つ。柱間は、桁行が10尺、梁間が8尺で、建物3が主殿、建物4が後殿という配置となる。その西北には、桁行3間、梁間2間の総柱の建物14がある。柱間は、桁行が5尺、梁間が6尺と規模は小さいものの、柱穴と柱穴の間をも溝状に掘る(布掘り)という特殊な構造をとる。その性格は不明であるが、楼閣状のものとするのも一考であろう。建物14の南の妻柱には、南北塀13がとりつく。その西側には桁行5間、梁間3間で西廂付の建物23、北方には建物18・26がある。

### C期

奈良時代後半にあたる。坪境の小路が廃され、再び2町以上規模の敷地となる。調査区の東南隅に東廂付の南北建物1、その西方に西廂付の南北建物6が、柱筋を揃えて並ぶ。建物6は1979年の調査区にも続いており、南の妻柱を検出していないので、桁行が10間以上の長大な建物となる。建物1も、建物6と同じ規模をもつものである。北方には、建物10・塀11がある。一棟の建物として復原したが、東西建物が南北に並び、間に塀を介するとも復原できる。その場合は、妻柱と、側柱のうち東から、2・4・6間目の柱穴がないということになる。いずれにしろ、これまでの発掘調査では検出していない特異な構造をとる。柱間は、東西方向が十尺等間、南北方向は南から十八、十六、十四、十八となる。建物10は、調査区のさらに北方に延びる可能性もあり、どの様な構造をとるのかということをも含めて、今後の検討課題としたい。C期には、七坪にかなり規

模の大きな南北棟があるが、建物10が位置、規模から考えて、正殿としての性格を持つものであったと推定できる。建物10の西方には、桁行7間、梁間2間の東西建物16があり、東西2間ずつに間仕切りをもつ。建物10の南の柱列と建物16の南の側柱はほぼ柱筋をそろえる。ほかに、建物22・25もこの時期のものであろう。

また、建物10の東方、建物1の北方には、井戸28が掘られた。方形の掘形の一辺が5m、深さが3.5mという巨大なもので、井戸枠が完存していた。井戸枠は、横135cm、たて25~30cm、厚さ6cmの板を正方形に組んで13段重ね、板と板は杢で結合する。底近くから、和同開珎、神功開宝、萬年通宝が計38枚出土した。祭祀に用いたものらしい。井戸枠内からは、土器、瓦に混じって、ウマの骨が出土した。最も新しい土器は平安時代初頭のもので、この頃まで使用していたことがわかる。

#### D期

奈良時代末~平安時代初頭にあたる。坪境の小路を再び設け、1町規模の敷地となる。建物4とほぼ同じ位置に、桁行7間、梁間3間の北廂付の東西建物5を建て、主殿とする。その東方には、桁行4間以上、梁間3間の東廂付の南北建物2が建つ。北の妻柱は建物5の身舎の北側柱と柱筋を揃え、東の脇殿となるが、これに対応する西の脇殿はない。C期の建物16は規模を縮小して、桁行5間、梁間2間の建物17に建てかえる。他に、建物21・24・27があるが、いずれも今回の調査区では一部を検出したのみで、具体的な規模は不明である。

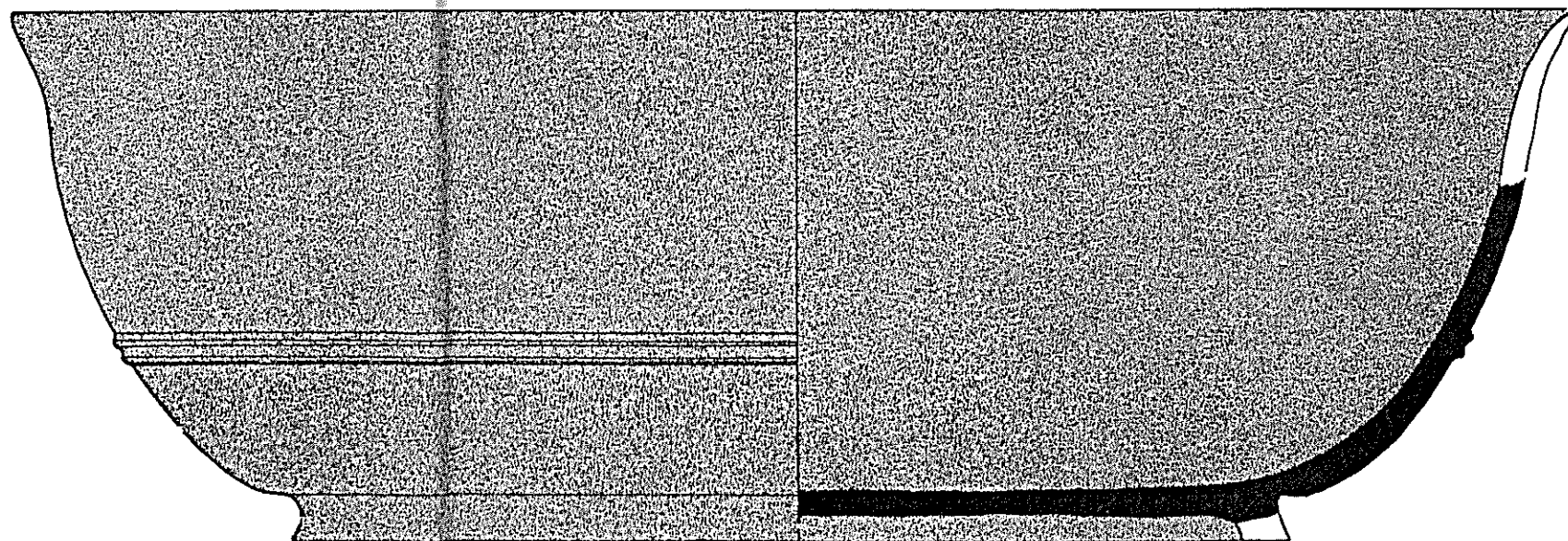
#### 3 出土遺物

今回の調査では、全域から多量の土器、瓦が出土したが、軒瓦、硯、土馬などの土製品は、七坪を調査した第178次、184次調査に比較して少ない。その中で、C期の建物16から出土した漆器(右図)が注目される。これは、東北隅の柱穴の柱抜取穴から出土したもので、柱穴に重なって現代の攪乱坑があったためか、上半部を欠失する。復原すると口径が45cm、高さ15cmほどになるとみられる。ケヤキ材を削ってつくった素地の全面に黒漆が塗られている。器形は高台のつく浅い

が削りだされている。奈良時代の漆器としてはあまり例をみない大型の製品で、高台がこわれて低くなったあとも器として使われた形跡をとどめている。

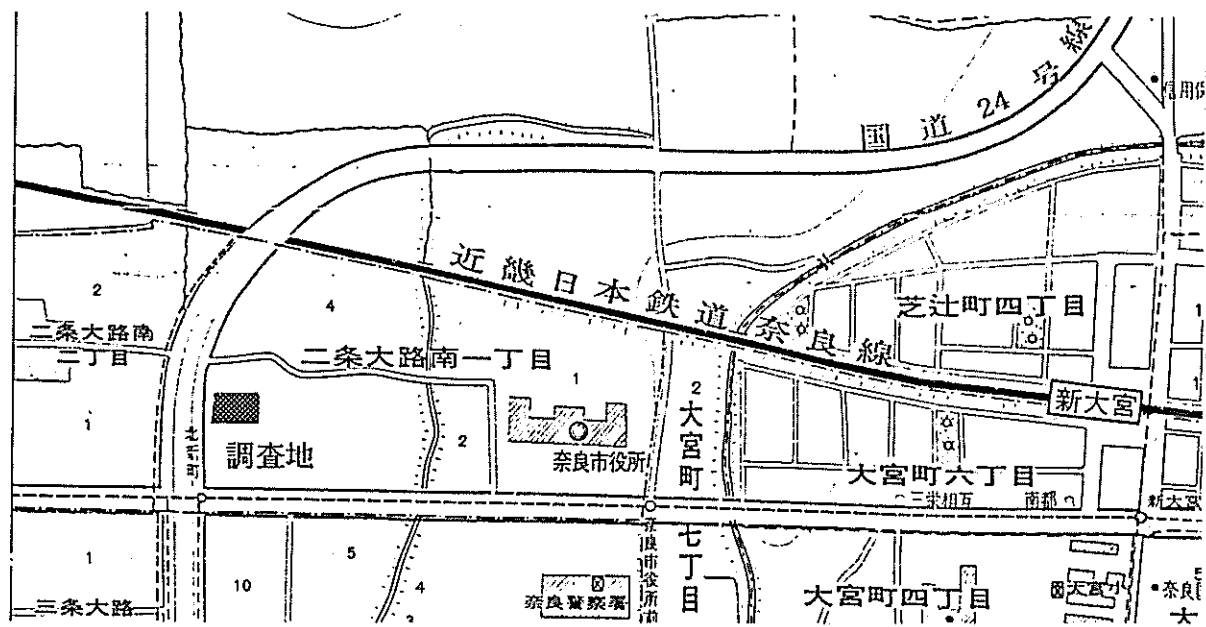
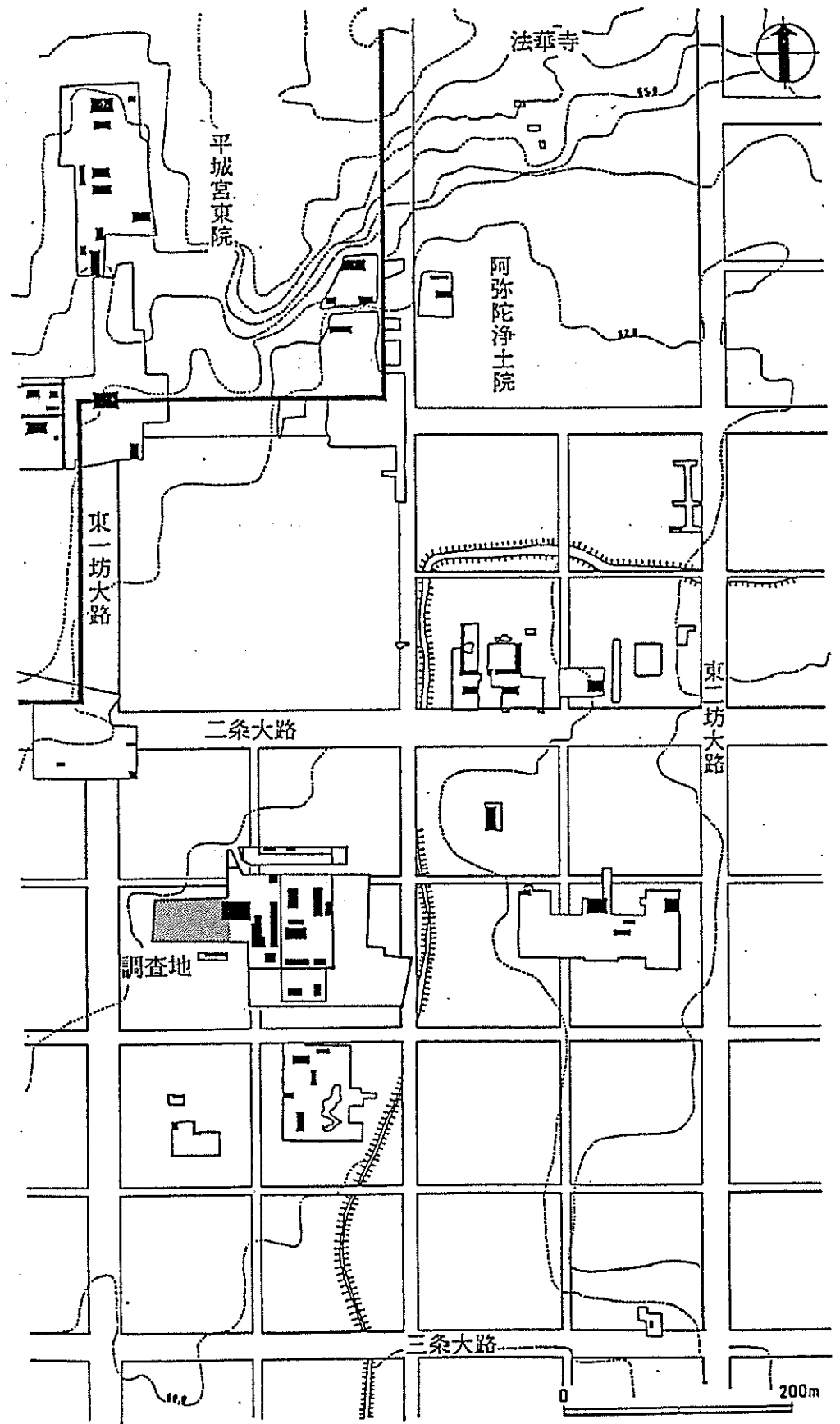
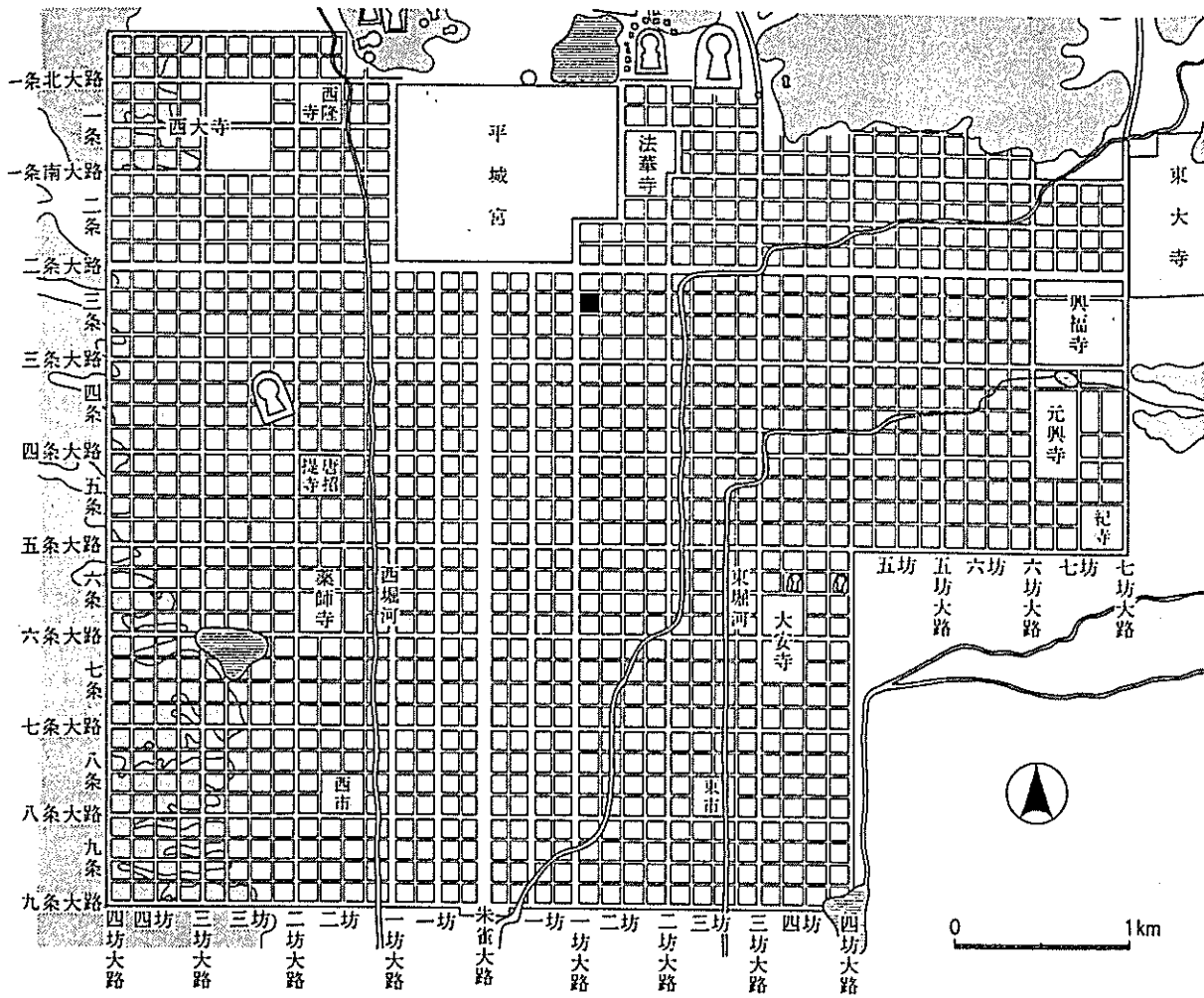
#### 4 まとめ

- 1) A期の区画の西限の掘立柱塀を検出し、これまでの調査の知見と合わせて、区画の概要が明らかとなった。
- 2) B期・C期・D期の中心的建物を検出し、二坪の中心部の様相が明らかとなった。
- 3) 京内における宅地の建物配置に、新たな知見を加えることができた。これによって、主殿が敷地の中央に位置し、その東西に脇殿が並び、ほかの建物も左右対称に並ぶという従来の復原では捉えられない例があることが判明した。
- 4) 漆器浅鉢が出土した。正倉院宝物にも例をみないもので、奈良時代の工芸の研究において貴重なものである。



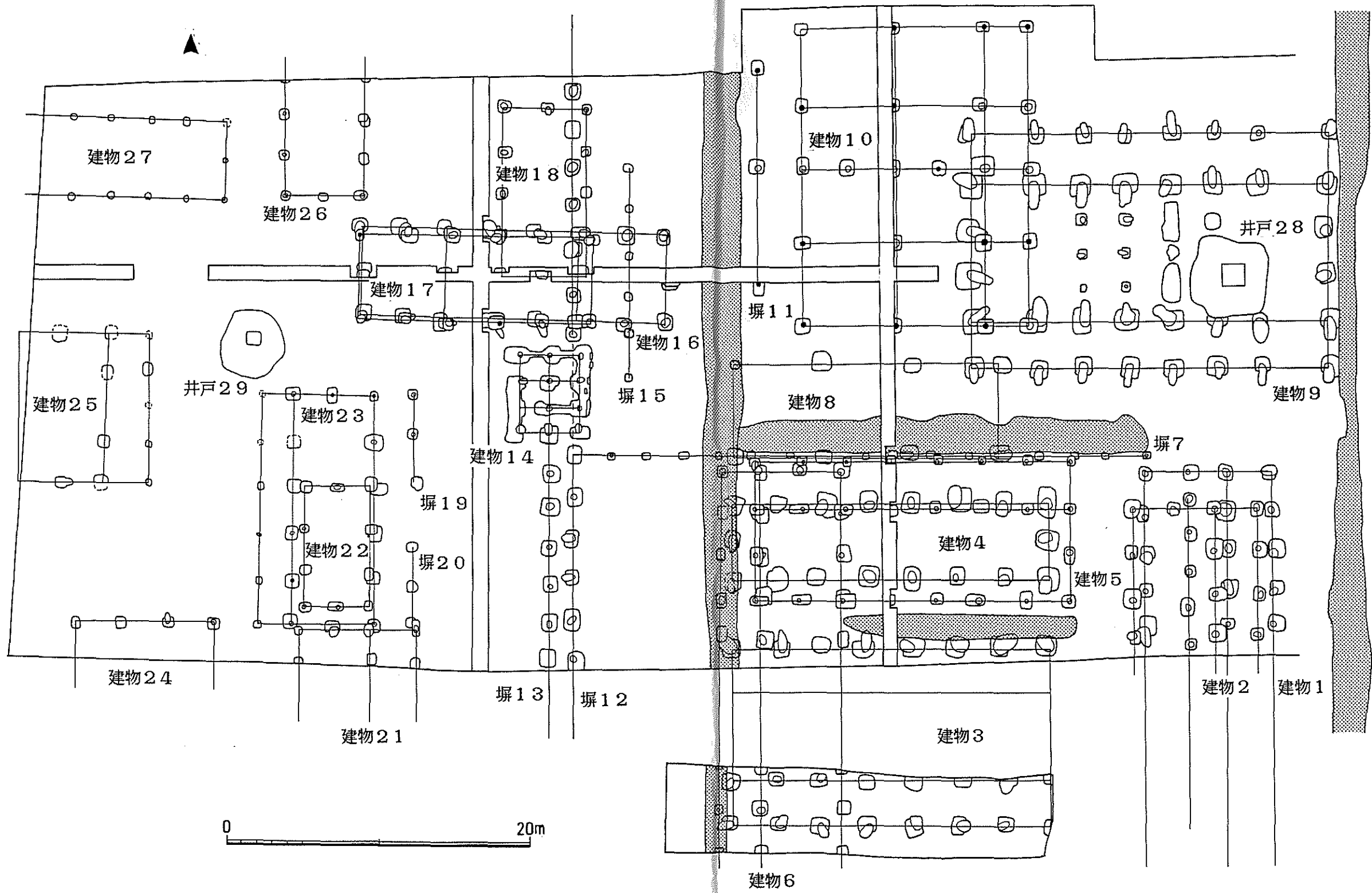
0 10cm

漆器浅鉢(縮尺2分の1)



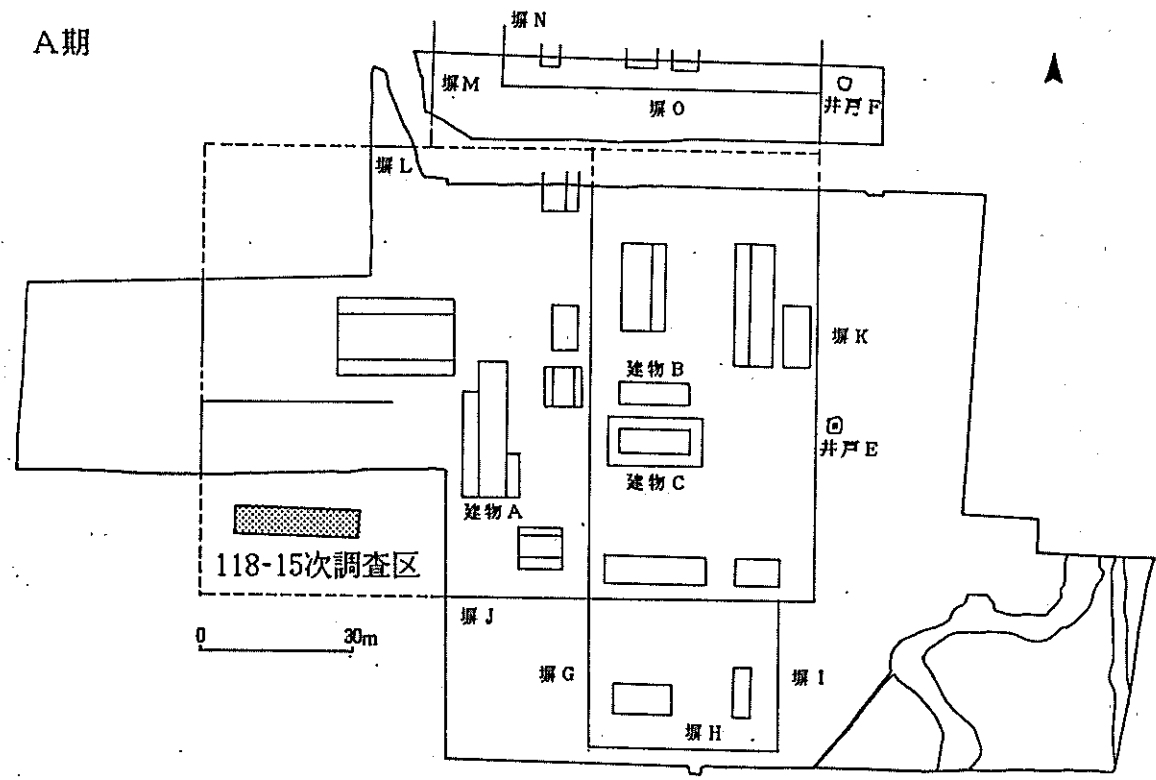
調査位置図

平城京左京三条二坊周辺の地形・発掘調査位置図

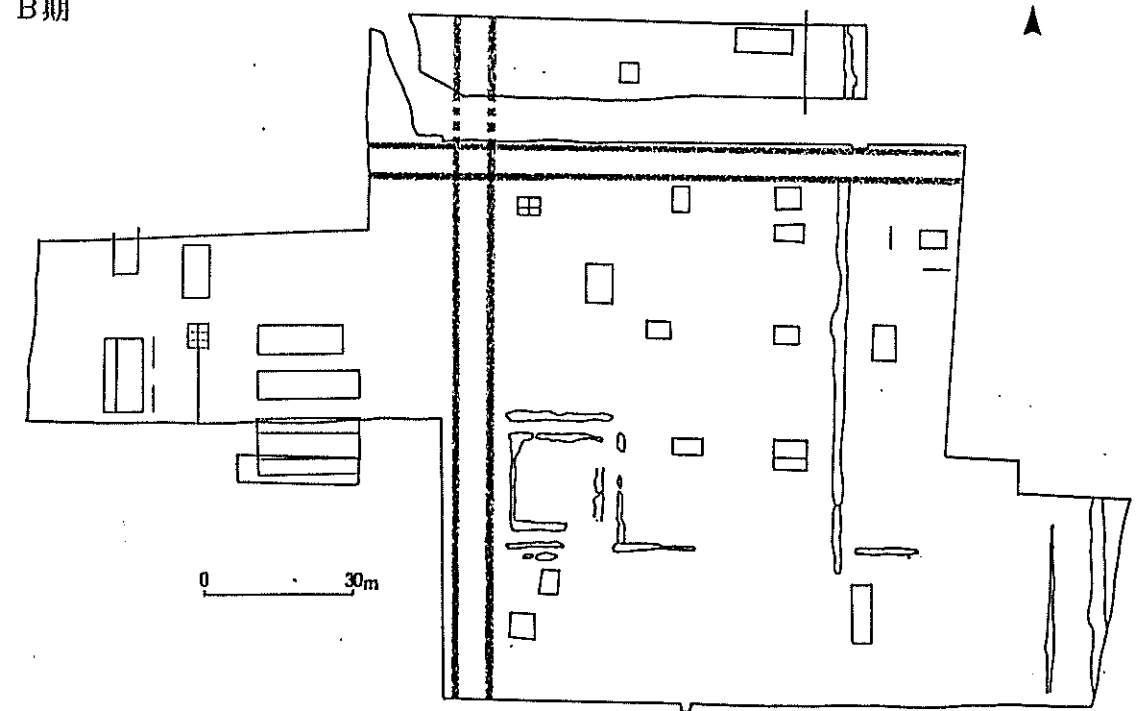


平城京左京三条二坊二坪発掘遺構図

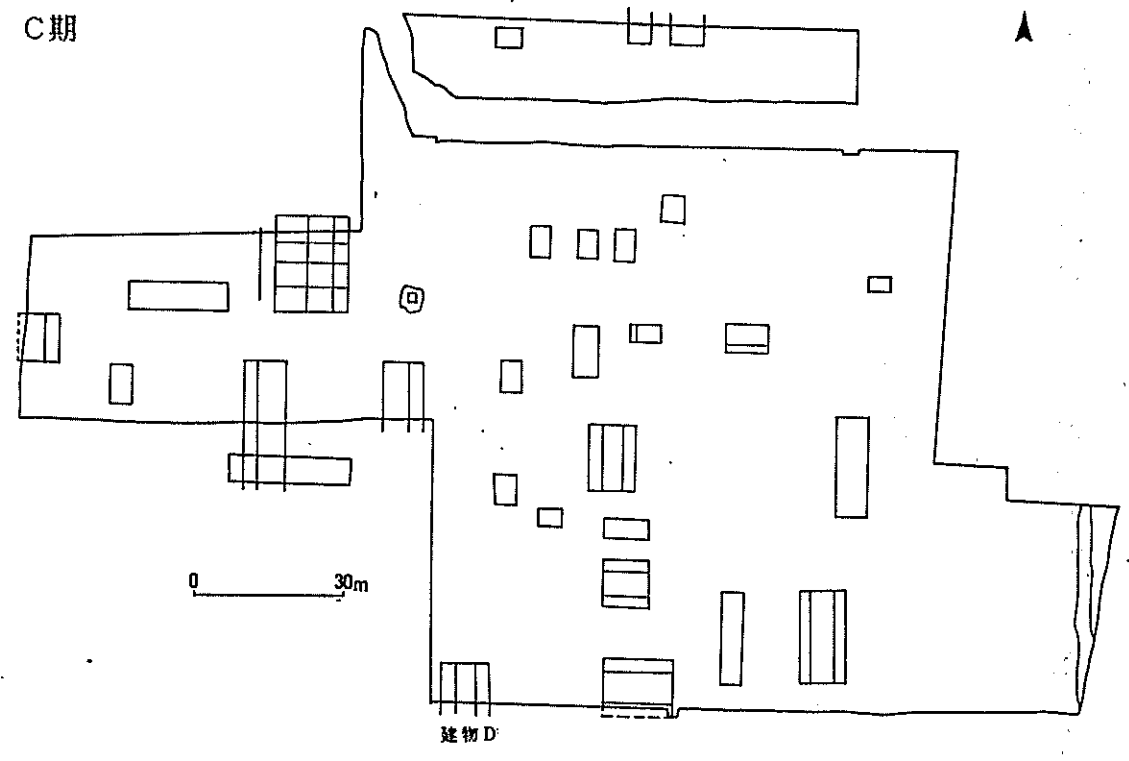
A期



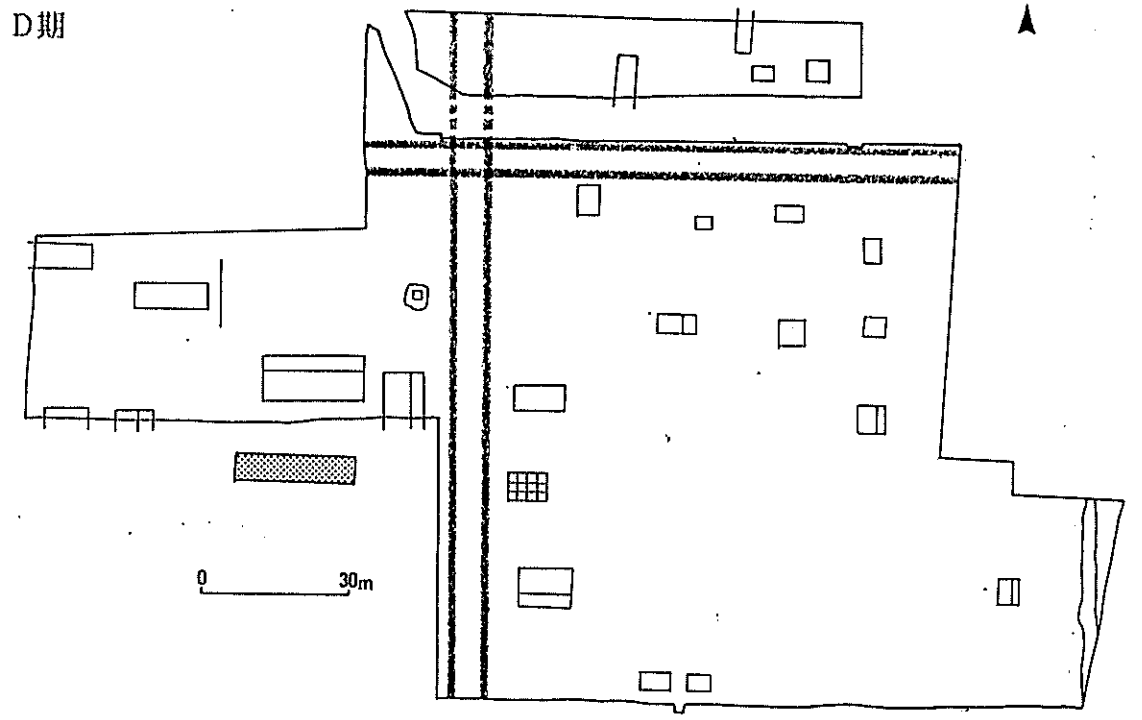
B期



C期



D期



二坪・七坪の遺構変遷図